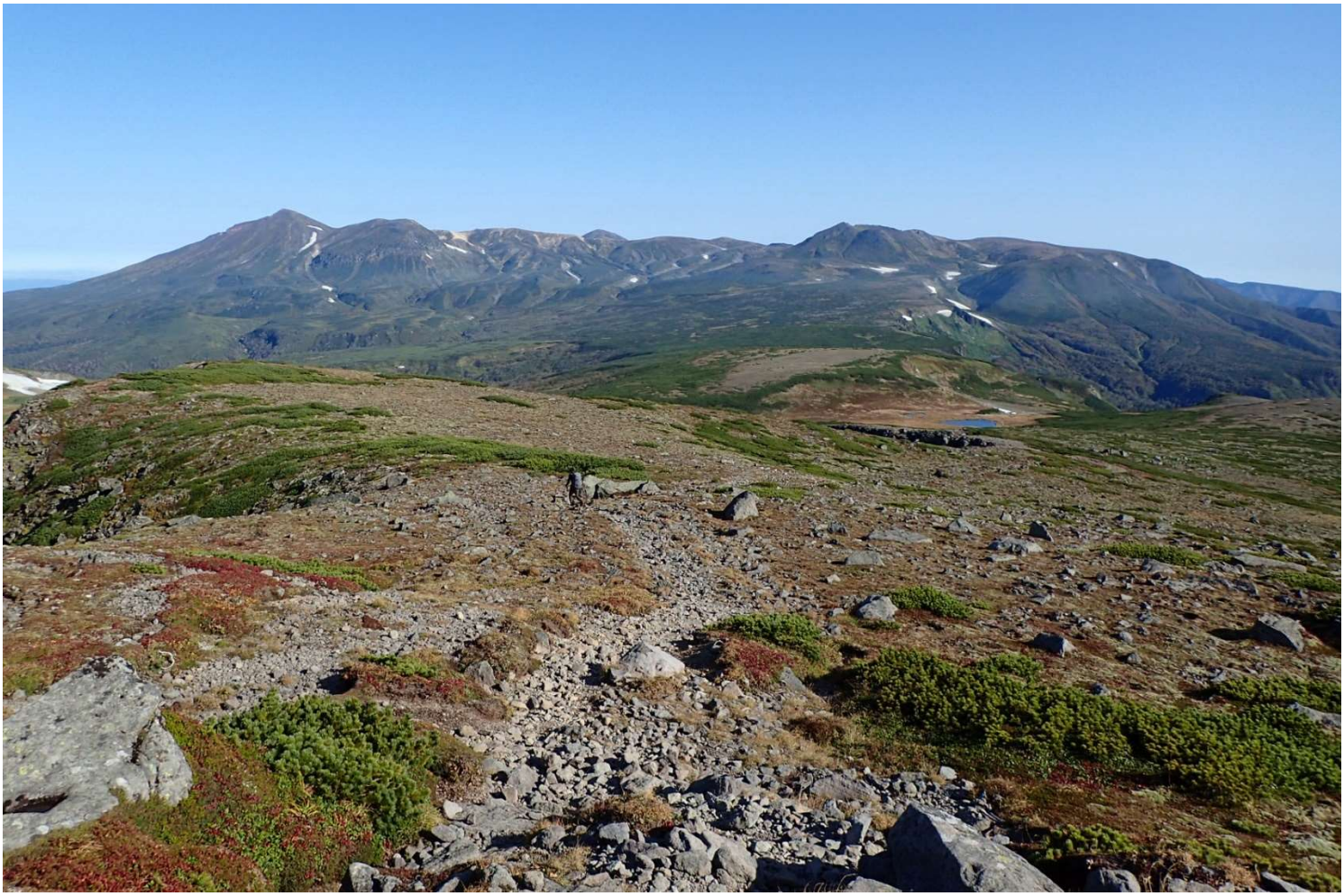
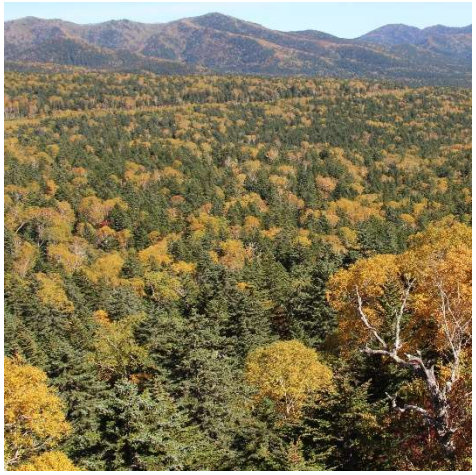


大雪山国立公園ビジョン

まもり、活かし、つなげよう
みんなでつくる、
世界を魅了する大雪山国立公園

令和2年6月　大雪山国立公園連絡協議会

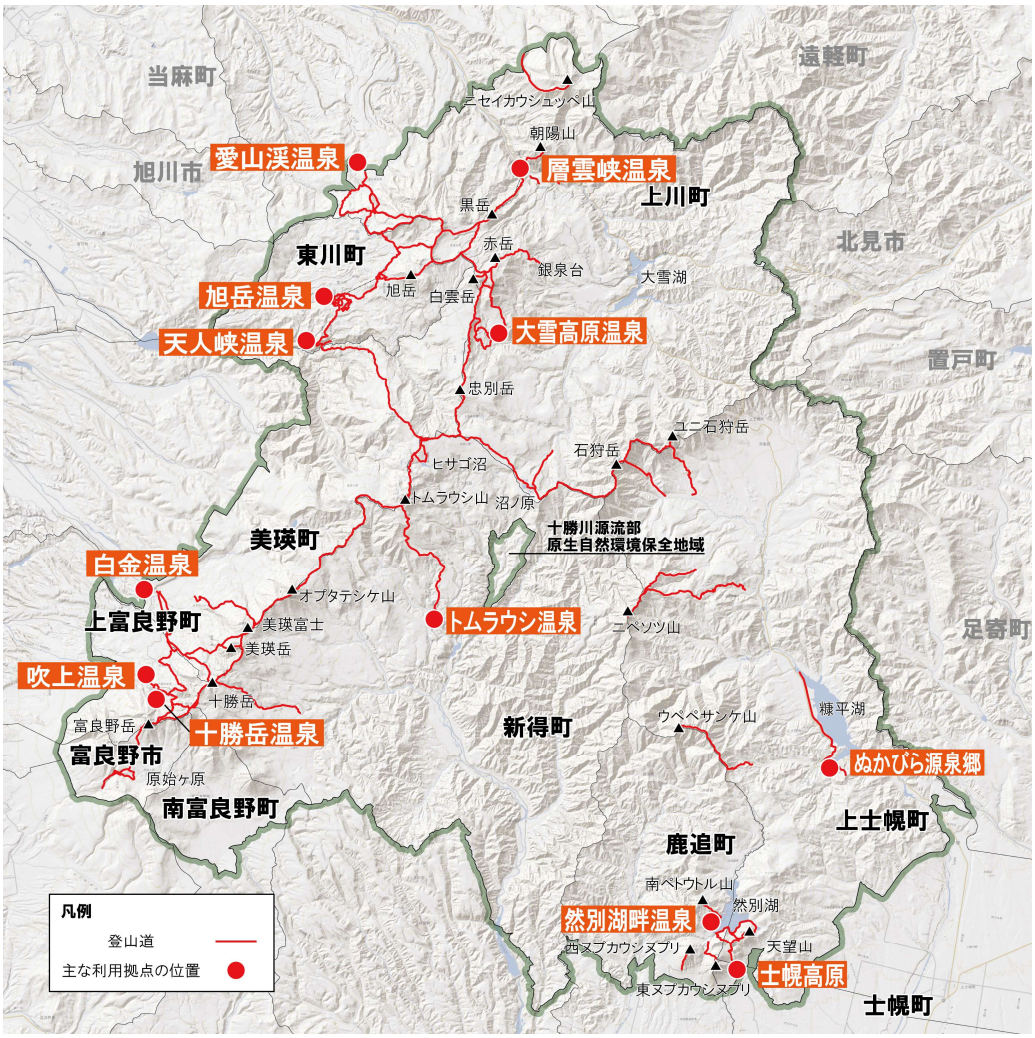


はじめに

「大雪山国立公園ビジョン～まもり、活かし、つなげよう　みんなでつくる、世界を魅了する大雪山国立公園～」は、大雪山国立公園に影響を与える近年の自然的・社会的環境の変化に対応するとともに、課題を解決し、「大雪山の自然環境が守られ、より豊かになった国立公園」、「魅力を活かし、質の高い利用体験ができる国立公園」、「つながっていく国立公園」を将来の目指す姿として実現するため、大雪山国立公園連絡協議会が策定したものです。

大雪山国立公園連絡協議会（私たち）は、このビジョンを協議会構成員の各関係者はもとより、利用者（観光客、登山者など）、大雪山国立公園に関心を持ち関わろうとするすべての人々、大雪山国立公園の周辺地域に住むみなさまと共有します。

そして、このビジョンをこれらすべての方々（みんな）の共通目標として位置づけ、一緒になり、それぞれができることを持ちより、連携、協力して、このビジョンを実現していきます。



大雪山国立公園

1．大雪山国立公園の価値と歩み

（１）大雪山国立公園の価値

大雪山国立公園（本ビジョンでは十勝川源流部原生自然環境保全地域も含む。）の広大で原生的な山岳景観は、日本でここだけにしかない、北海道、そして大雪山国立公園関係10市町が持つ優れた資源です。

広大な山岳景観は、中生代に海底に堆積[1]した日高累層群が隆起し、その上に、新生代（主に第四紀）の火山活動により溶岩や火砕流が噴出して広大な高地が形成された[2]ことによるものです。この高地は表大雪地域、東大雪地域に共通する基盤ですが、表大雪地域では火山噴出物が厚く堆積したため広大で平坦な高山帯が形成され、東大雪地域では多くの樹海が形成されました。

また、山岳景観が広大であるため、その中に含まれる景観要素の多様性も際立っています。現在も噴煙を上げる旭岳や十勝岳などの活火山、十勝三股をはじめとする大きなカルデラのほか、大雪山の名にふさわしいたくさんの雪や雪氷現象、周氷河地形などが見られます。エゾオヤマノエンドウ、ホソバウルップソウなどの大雪山の固有種を含む高山植物のお花畑のほか、高層湿原も各地に見られます。ヒグマやナキウサギなどの哺乳類、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモンなどの高山蝶をはじめとする昆虫など多種多様な動物が生息しています。森林は、針広混交林、針葉樹林帯、ダケカンバ帯、ハイマツ帯が垂直に分布し、各地の利用拠点では、峡谷と柱状節理、湖、滝、温泉が見られます。

十勝岳の火山活動

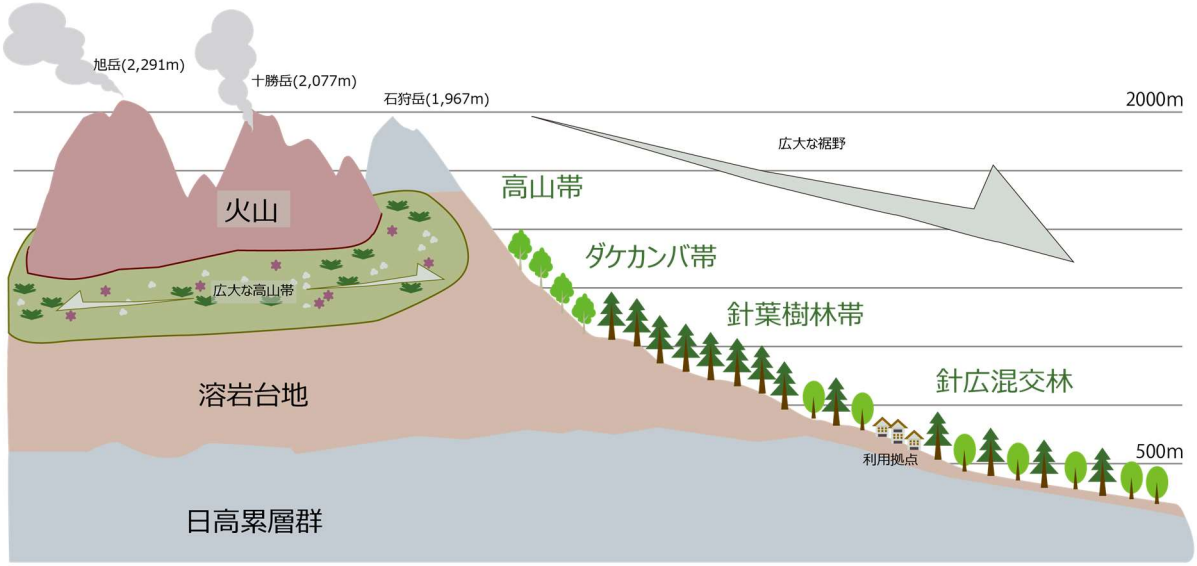
ホソバウルップソウ

ヒグマ

ナキウサギ

アサヒヒョウモン

1 これらの堆積はおよそ１億4000万年前（日本シームレス地質図 https://gbank.gsj.jp/seamless/download/downloadIndex.html）。
2 これらの堆積はおよそ500万年～100万年前（小疇・野上ほか編 2003「日本の地形２北海道」東京大学出版会 p118,129）。



大雪山国立公園の地史的成り立ち

さらに、これらの景観要素には国際的な観点からも特徴あるものがあります。例えば、大雪山は周氷河地形が大規模に残された場所の南限であると考えられ、また、カムチャッカ半島、東シベリア、千島列島といった各地に成立する北方林が大雪山では同所的に見られます[3]。

大雪山国立公園の山麓部には、多くの温泉が湧いています。それぞれの開湯の歴史を背景として独特な温泉地の景観が形成され、国立公園の利用拠点となっています。温泉に入ることで、大雪山国立公園の火山活動を感じながら、保養を楽しむことができます。また、高山帯には登山道が整備されており、風景探勝や登山を通じてこれらの広大で原生的な山岳景観を体験できます。

3 沖津進 2002『北方植生の生態学』古今書院

このように、大雪山国立公園は生物多様性、生態系、地形・地質、利用のいずれについても優れた価値を持ち、さらにこれら以外の多様な観点からも高い評価を得ています。大雪山国立公園は、学術上の貴重性の観点から国の特別天然記念物に指定され、森林保護上の重要性の観点から森林生態系保護地域が設定されています。また、地形・地質の観点からは、とかち鹿追ジオパークが日本ジオパークに認定されたほか[4]、文化の観点からは、大雪山を含むストーリーが「カムイと共に生きる上川アイヌ～大雪山のふところに伝承される神々の世界～」として日本遺産[5]に認定されました。

とかち鹿追ジオパーク（然別湖）

日本遺産認定のロゴマーク

DAISETSU
KAMIKAWA AINU
カムイと共に生きる
上川アイヌのロゴマーク

とかち鹿追ジオパーク（苔の森）

日本遺産認定のポスター

Tokachi Shikaoi Geopark
とかち鹿追ジオパーク
とかち鹿追ジオパークのロゴマーク

4 日本ジオパーク委員会により 2013（平成 25）年 12 月認定。
5 大雪山を最も神々の国に近く、自然の恵みをもたらす、カムイミンタラ～神々の遊ぶ庭～として崇拝してきたことを含むストーリーで、文化庁により 2018（平成 30）年 5 月認定。

2003（平成 15）年には世界自然遺産の候補地の選定の検討対象となり、顕著な価値があるとの意見（環境省・林野庁による平成 15 年世界自然遺産候補地に関する検討会）もあったほか、大雪山国立公園を含む各地で様々な枠組みへの認定、登録に向けた取組が進められています。

これらの動きそのものも、国立公園の優れた価値のあらわれであると言えます。

大雪山コラム

大雪山について

大雪山という名称が文献上最初に登場したのは、1903（明治 36）年に松原岩五郎著「日本名勝地誌　第九編　北海道之部」（博品館発行）においてです。その後、1918（大正７年）に旭川中学校教諭の小泉秀雄が「北海道中央高地の地学的研究並植物分布の研究」を発表し、表大雪地域の北部を大雪山と呼称してその最高峰を旭岳とする整理を行いました。この考え方が現在でも一定の影響力を持つのは確かです。

しかし、本ビジョン１（１）「大雪山国立公園の価値」において示したとおり大雪山国立公園の地史的成り立ちや、1934（昭和９）年に大雪山国立公園が現在の区域で指定されて 85 年以上が経過して大雪山の名称が公園区域全体で浸透したことを踏まえ、本ビジョンでは「大雪山」という場合、大雪山国立公園全体と捉えることとします。

なお、表大雪地域は、上川町、東川町、美瑛町、上富良野町、富良野市、南富良野町の地域、東大雪地域は、士幌町、上士幌町、鹿追町、新得町の地域を指すこととします。

（２）大雪山国立公園の歩み

大雪山調査会が作成した書籍やパンフレット

大雪山国立公園は 1934（昭和９）年に指定されましたが、大雪山が有する価値を発掘して活かす取組は、それ以前から行われてきました。

国立公園制度ができる遥か以前の 1911（明治 44）年、当時の愛別村長、太田龍太郎が現在の層雲峡を「霊山碧水」と名付けて国立公園として経営すべきとの建白書（意見書）（石狩川上流霊域保護国立公園経営の件）を逓信大臣に送付したのが最も古い記録です[6]。また、1924（大正 13）年には実業家や研究者（小泉秀雄など。大雪山コラムも参照）が中心となり大雪山調査会が結成され、学術研究が大きく進展しました。その成果をもとに利用者向けの登山案内書やパンフレットが作成され、高山植物保護地域の設定運動等が行われました。

大雪山国立公園は、日本の中で先駆けて、自然資源の価値を科学的に明らかにし、保全を図ってきた特色ある地域であることを改めて認識する必要があります。

第二次世界大戦後 60 年くらいは、戦後の復興、高度経済成長、その後のバブル経済等を背景として、大雪山国立公園内においても、観光をはじめとする産業と自然保護との調整が大きな課題となった時代でした。

大雪山の裾野はエゾマツやアカエゾマツを中心とする森林で覆われていました[7]が、1954（昭和 29）年の洞爺丸台風は大雪山に甚大な被害をもたらしました。これを機に風倒木の搬出、処理等によって林業が急速に隆盛し、風倒地以外での伐採も進みました。こうしたことによって、森林の蓄積量は半分以下となり、またトドマツが多くなるなどかつての森林とは異なる林相に変化しました[8]。また、硫黄等の鉱物資源の採掘、農業、生活用水等の確保のためのダム建設、観光道路の建設、電源開発（設備の建設のほか資源調査を含む）等の計画が進みました。

---

6 笹川良江編・太田龍太郎著 2004『「大雪山国立公園」の生みの親　太田龍太郎の生涯―復刊「霊山碧水」―』北海道出版企画センター

7 北海道 1975「大雪山自然生態系総合調査　中間報告（第１報）―十勝川流域―」p34、同 1976「大雪山自然生態系総合調査　中間報告（第２報）―石狩川流域―」p180

8 石狩川源流域においては、風倒跡に成立した森林は、風倒前の優占種であったエゾマツやアカエゾマツに代わり、トドマツが優占する林分やカンバ類やヤナギ類が優占する林分となっており、また、材積も、風倒被害を受けていない原生保護林の材積（620 ㎥/ha）と比べて 20～55%となっているという（北海道森林管理局 2015「石狩川源流森林総合調査（第４次）報告書」p7-8,27-28）。被害率が石狩川源流域より低かった十勝川源流域においても、十勝川源流部原生自然環境保全地域の林分が 400 ㎥/ha の材積を有しているのに対し、その周辺の林分の材積は 200 ㎥/ha 未満となっているという（長池卓男・久保田康裕 2000「自然保護区管理と森林施業―大雪山国立公園を事例に―」遺伝 54 巻 9 号,p59）。

一方で、自然保護運動の盛り上がりにより大雪山国立公園の価値に及ぼす影響が著しい建設計画は中止されました。

開さくは可能 大雪山観光道路

大雪山観光道路計画図

東川村

工費は四億四千万円？

調査隊論結 航空写真でさらに検討

三日かかって踏破

観光道路の計画のための調査について報じる新聞記事
（北海道新聞　昭和 34 年 7 月 30 日掲載）
これらの計画は中止された。

21 世紀に入り持続可能な社会の構築が社会全体の課題となりました。

2006（平成 18）年には全国の国立公園に先駆けて、原生的な雰囲気の有無など、自然環境に合わせて登山体験を享受できるような登山道の整備や維持管理を目指した、登山道の管理水準（現在の「大雪山グレード」）が定められました[9]。

2007（平成 19）年に策定した大雪山国立公園管理計画では、重要な自然環境を厳正に保全しつつ体験するために必要な利用空間を確保して自然とのふれあいを増進するといった、保護と利用をバランスよく両立させるワイズユースの考え方が打ち出されました。

また、この頃から表大雪地域の一部を中心として携帯トイレを普及する取組が始まりました。この動きは、2018（平成 30）年には大雪山国立公園連絡協議会と道内の山岳関係 18 団体が共同で「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」を発出することに結実し、官民が連携して大雪山国立公園全体で携帯トイレを普及する方針が対外的に発信されました。「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」により、これまで大きな問題とされていたトムラウシ南沼野営指定地や美瑛富士避難小屋周辺に携帯トイレブースの増設や新規設置が行われたほか、関係団体が協力して行う維持管理や普及啓発に向けた動きが進んでいます。

本格的な少子高齢化、人口減少社会を迎える中で、自然環境保全をはじめとする環境問題は、経済や社会の課題と相互に密接に関連し、複雑化しています。大雪山国立公園では 2007（平成 19）年に策定された管理計画の考え方を継承しつつも、今後の管理運営においては、地域社会の課題解決に国立公園が寄与するといった発想のもとで関係者が連携していくことも重要となっています。

9 平成 27 年度改定。

大雪山コラム

大雪山グレード

大雪山グレードは、登山道を自然条件や管理状況などを基に５段階にランク付けして登山道の管理水準を示し、それぞれの特徴に応じた維持管理や適正な利用を推進するものです。

維持管理にあたっては、原生的な自然が色濃く残る山岳地域の登山道では自然の雰囲気を保つことを最優先とする一方、利用拠点からのアクセスがよい山麓地域に近い登山道では快適に歩くことができるような維持管理水準としています。

また、利用者に対しては、原生的な雰囲気が残る登山道では高度な登山技術を要し難易度が高いことを示す一方、利用拠点からのアクセスがよい山麓地域に近い登山道では難易度は低く多様な利用者が利用できることを示しています。このように、利用者に対して自己責任で行動判断を行う時の目安（区間における行動判断の要求度や難易度）を示し、力量に応じた登山を推奨するものです。

北海道地方環境事務所で 2006（平成 18）年に策定され、2015（平成 27）年６月に改定されています。

- G1　大雪山グレード１　大雪山の自然とふれあう探勝ルート
- G2　大雪山グレード２　大雪山の自然とふれあう軽登山ルート
- G3　大雪山グレード３　大雪山の自然を体感する登山ルート
- G4　大雪山グレード４　大雪山の厳しい自然に挑む登山ルート
- G5　大雪山グレード５　大雪山の極めて厳しい自然に挑む登山ルート

大雪山グレードが示された地図の例

2．大雪山国立公園の現状と課題

（１）大雪山国立公園に影響を与える自然的・社会的環境の変化

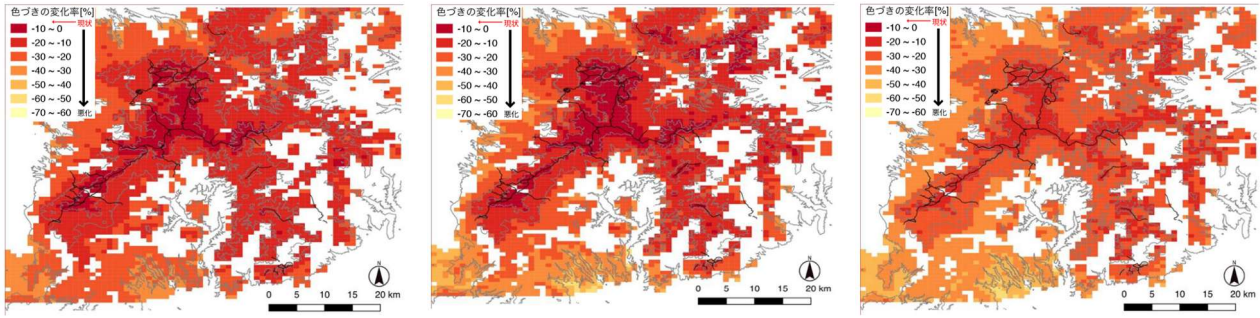
１）気候変動

ササの広がり（五色ヶ原）

人間活動の拡大に伴う温室効果ガスの排出により、気候変動が生じ、気温が上昇し、また、極端な降水や熱波が頻繁に発生する可能性も非常に高くなっています。大雪山国立公園では、高山植生の生育適地の減少、紅葉の色づきの低下、山岳地域での降水量の増加、ササや亜高山帯森林植生の拡大が予測されています。

これにより、紅葉の色づきの低下による観光への影響や、降水量の増加による登山道の侵食、荒廃の深刻化が懸念されます[10]。さらに、近年、大雪山国立公園内でも局地的な集中豪雨により、登山口へアクセスする道が崩壊する被害も生じています。

また、暖冬の影響によりエゾシカの分布が拡大し、大雪山国立公園の高山植生についても、採食や踏圧による植生や景観の変化が見られています。



MIROC5※1（RCP8.5）　MRI-CGCM3※2（RCP8.5）　IPSL-CM5A-LR※3（RCP8.5）

今後地球温暖化対策を取らなかった場合（RCP8.5 の場合）、2096～2100 年に紅葉の色づきがどのように低下するか３つの気候モデルで示したもの。色が薄いほど紅葉の色づきが悪くなることを示しており、標高が低い地域で特に色づきが悪くなる傾向が示された。

※1：東京大学、国立環境研究所などが開発した気候モデル　※2：気象庁が開発した気候モデル　※3：IPSL という海外の研究機関のコンソーシアムが開発した気候モデル

大雪山における紅葉の将来予測結果一覧

	色づき	開始日	最盛日	終了日
高標高域（>1500m）	RCP8.5/2100 年に 10～20%悪化	RCP2.6/2050 年から早まる	変化なし	変化なし
低標高域（<1500m）	RCP8.5/2100 年に大きく悪化	RCP2.6/2050 年から早まる	変化なし	ばらつき大

10 国立研究開発法人国立環境研究所「平成 29 年度生物多様性分野における気候変動への適応策検討業務報告書」（平成 30 年 3 月）

2）人口減少と高齢化、ライフスタイルの変化及び価値観の多様化

大雪山国立公園関係市町の人口は減少傾向であり、人手不足が生じています[11]。国立公園に関係するＮＰＯや地域活動団体、観光、交通等の業界でも同様で、特に施設の維持管理を行う関連業界（例えば、建築、土木、電気等）で担い手不足が深刻です。

ライフスタイルの変化と価値観の多様化はレジャーの多様化ももたらしました。

余暇活動の参加人口のうち、国内観光旅行は 2011（平成 23）年以降連続して１位であるものの、その数は減少しています。一方、余暇活動の内容は多様になっています[12]。旅行形態についても、団体旅行から個人旅行へ変化し、個人の指向や好みに合ったスタイルに変化しました。

温泉地に団体で宿泊して景勝地を探勝する旅行形態を前提としてサービスを提供する宿泊施設や事業者は苦戦する一方、その場所でしか見られない特色のある資源を発掘して活用した特定の地域がＳＮＳ等で話題になり、その地域の旅行者数だけが伸びるという二極化の状況も生じています。

SNS で話題となった青い池（美瑛町）

ライフスタイルの変化や価値観の多様化の背景には、近年の情報通信技術の急速な進展もあると考えられます。利用者は旅行や登山に必要な情報の多くをスマートフォンから得るようになりつつあります。また、ドローンなどの無人小型航空機（UAV、以下「ドローン等」という。）の小型化により、調査研究や趣味で活用できる機会が増える一方、利用者間でトラブルも生じています。このように、近年の様々な情報通信技術の進展により、大雪山国立公園に関する情報の入手方法や利用方法も変化しています。

---

11 2014（平成 26）年に有効求人倍率が１倍を超えた。

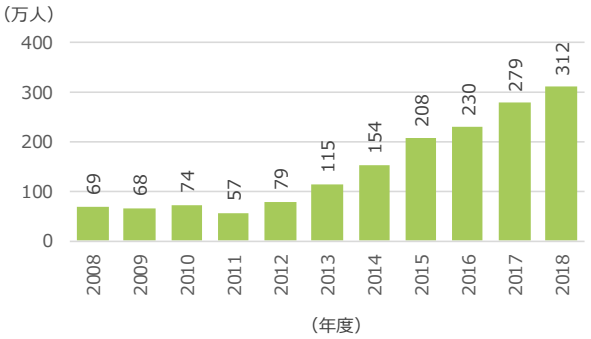
12 公益財団法人日本生産性本部 レジャー白書概要発表資料 2009～2018

3）外国人利用者の増加

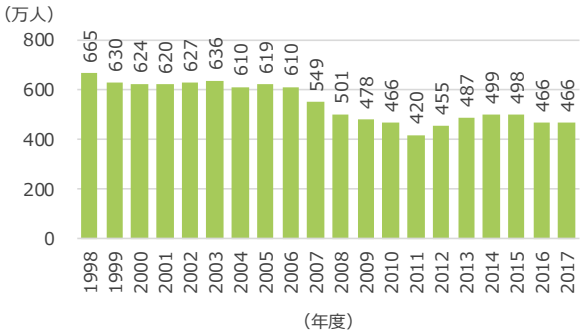
政府による観光立国の実現に向けた取組を背景に、我が国の外国人観光客数は急速に増加しています。また、国立公園においては、訪日外国人利用者数を 2020（令和２）年までに 1,000 万人にすることを目標とした、「国立公園満喫プロジェクト」が 2016（平成 28）年に立ち上がり、官民連携でのインバウンド対応の取組が今まさに進められています。

北海道を訪れる外国人の数はこれまで年間60～70万人で推移してきましたが、2013（平成 25）年に 100 万人を超え、現在 300 万人に到達する勢いです[13]。統計情報がある層雲峡地区においても、ここ数年で、外国人宿泊者数は年間 20 万人を越え、層雲峡ビジターセンターの利用者についても外国人が３千人程度から６千～７千人に増加しました。山岳地域、山麓地域を問わず、数多くの外国人旅行者が大雪山国立公園に訪れるようになったといえます。山岳地域では冬期も含めた外国人利用者が増加する一方、遭難事故の増加が問題となっています。

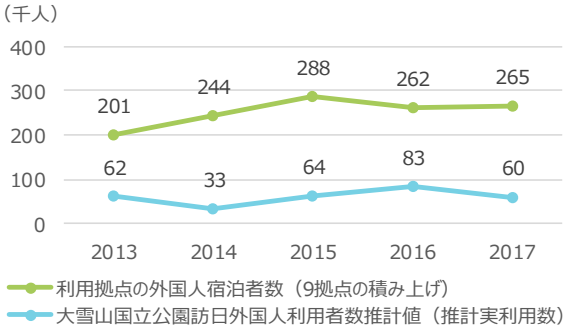
政府は観光を我が国の基幹産業に成長させて観光先進国を目指す[14]等、観光政策を重視することとしており、今後もさらなる訪日外国人の増加が予想されます。



北海道を訪れる外国人観光客数の推移



大雪山国立公園の利用者数の推移



大雪山国立公園における外国人利用者数の推移

---

13 北海道経済部観光局資料

14 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議「明日の日本を支える観光ビジョン― 世界が訪れたくなる日本へ ―」（2016（平成 28）年３月）

（２）大雪山国立公園の課題

気候変動、人口減少と高齢化、ライフスタイルの変化、価値観の多様化、技術の進展、外国人利用者の増加といった自然的・社会的変化に対応し、次の課題を解決していく必要があります。

１）山岳地域の荒廃

①保全上の課題

i）植生等の変化

大雪山国立公園では、気候変動を背景とした気温や積雪の変化、エゾシカの分布拡大、ササの拡大などにより、高山植物のお花畑が減少し、生物多様性への影響が懸念されています。

また、近年、外来生物法に基づく特定外来生物であるセイヨウオオマルハナバチが大雪山国立公園の高山帯で確認されることもあります。仮に定着してしまえば、在来のマルハナバチが駆逐され、高山植物の生育に大きな影響が出ること[15]が懸念されています。また、大雪山国立公園には延長約 300km の登山道があります。登山者の踏圧や近年の局地的な集中豪雨などにより荒廃が進むと、登山道が拡幅したり、登山道外へ土砂が流出したりします。これにより、登山道沿いの高山植生が減少・衰退しています。登山者がし尿を排するために登山道から外れて歩くことでも、高山植生が衰退しています。

ii）地形や土壌の侵食

登山者の踏圧や集中豪雨などにより荒廃が進み、登山道が拡幅したり、登山道外に土砂が流出したりすることにより、被植階状土をはじめとする周氷河地形が消失した場所も見受けられ、地形や土壌の侵食も課題です。

---

15 巣の乗っ取り等の直接的な駆逐以外にも、在来のマルハナバチの繁殖の阻害、盗蜜による高山植物の種子生産や繁殖の阻害の可能性がある（北海道地方環境事務所「大雪山高山帯におけるセイヨウオオマルハナバチ防除の考え方」（平成 30 年２月））。

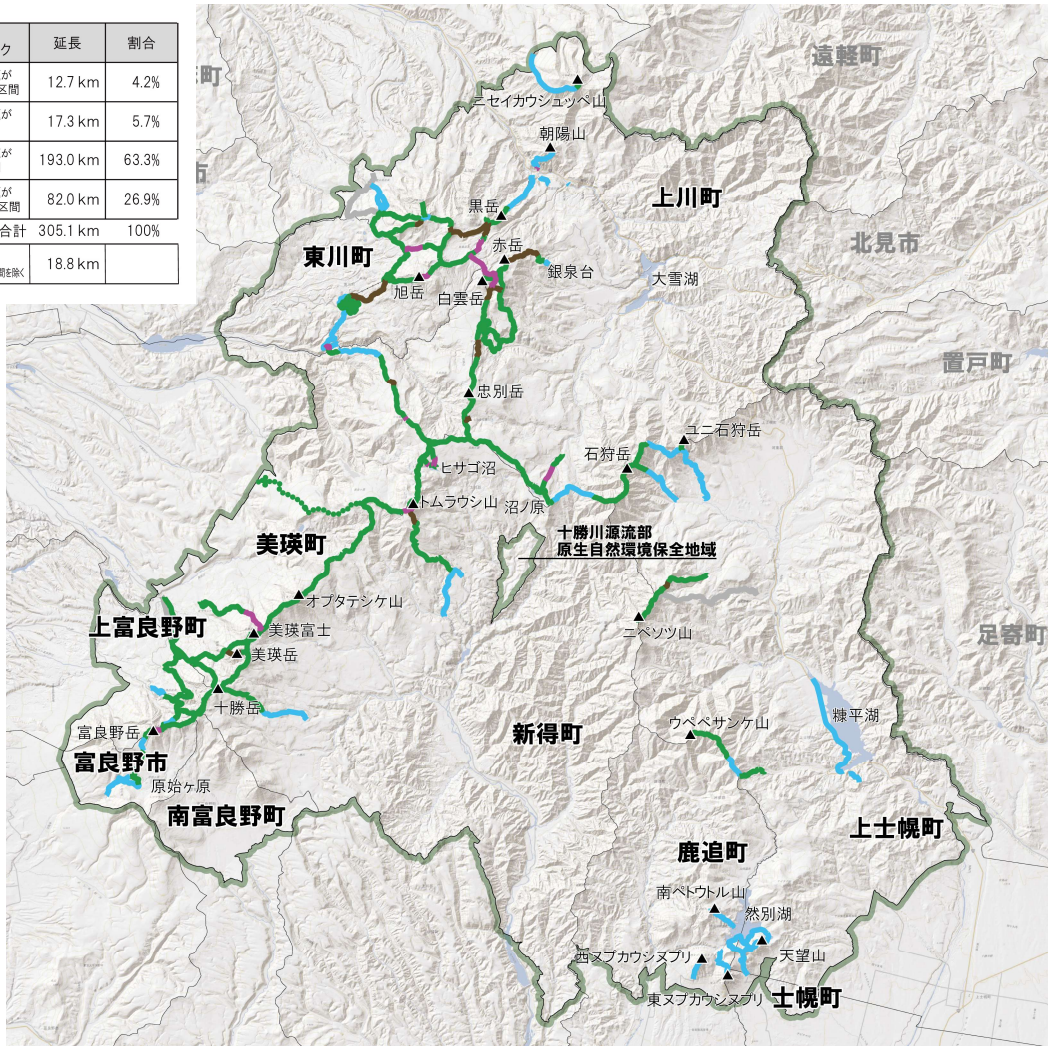
②利用上の課題

i）施設の荒廃と老朽化

大雪山国立公園の登山道は、火山噴出物に由来することから脆弱であり、登山利用による一定の荒廃は避けられず、対策をせず放置すると荒廃が止まらない区間もあります。

現在、国立公園内の登山道の約 75%が保全上の課題がある区間とされています。

凡 例	登山道の保全対策ランク	延長	割合
	A 保全上の課題が極めて大きい区間	12.7 km	4.2%
	B 保全上の課題が大きい区間	17.3 km	5.7%
	C 保全上の課題が中程度の区間	193.0 km	63.3%
	D 保全上の課題が顕著ではない区間	82.0 km	26.9%
	合計	305.1 km	100%
	非適用 今後供用の見込みがない区間を除く	18.8 km	



大雪山国立公園の歩道の荒廃状況

（大雪山国立公園登山道管理水準保全対策ランク（2015（平成 27）年改定）の区間を示した図）

荒廃した登山道は歩きにくく、利用体験の質の低下につながります。なお、登山者は歩きやすい場所を求めて登山道の脇を歩き、さらに登山道の拡幅が進むなど、自然環境保全上の課題と密接に関連しています。

また、誘導標識、案内板、避難小屋等の施設の老朽化も課題です。

登山道の侵食

ii）し尿の問題

トイレの無い野営指定地や避難小屋を中心として、野外のし尿処理が問題となっています。登山道から外れて植生帯へ踏み込むことによる自然環境保全上の課題があるほか、排泄物やトイレットペーパーが放置されることによる景観の悪化や利用体験の質の低下が生じています。

放置された排泄物やトイレットペーパー

iii）情報提供

大雪山国立公園では、特に誘導標識や案内板の多言語表記が不十分であり、外国人利用者の利用に問題が生じています。また、登山利用に関する情報を集約して発信する必要性が増してきています。近年、日本人、外国人を問わず、多くの登山者が情報を得ているスマートフォンを通じて大雪山国立公園の登山道に関する基礎的な情報を、実際に現地へ来る前に多言語により得ることができるようにする必要があります。

iv）利用者間、利用者・管理者間で生じる問題

ドローンなど近年進展している新しい技術は、これまで山岳地域で利用されたことはないため、原生的な自然環境になじまないと考える利用者に不安や不快感を与え、利用者間でトラブルになる場合があります。また、大雪山国立公園における利用のルールやマナーに対する理解が不十分な外国人利用者が、登山道を外れて歩く、野営指定地以外にテントを張るなどの行動をとり、管理者との間でトラブルになるケースも生じています。

これらの①保全上の課題と②利用上の課題は、国立公園の問題であるばかりか、地域社会としての課題でもあります。例えば、登山道の荒廃、施設の老朽化、し尿の問題は、地域の観光資源の劣化とも言えますし、また、これらにより登山者数が減少することは、各市町の観光客の減少につながります。山岳地域の荒廃がさらに進行すれば山麓での湧水を活用した取組等もイメージダウンして地域の産業にも影響が及ぶ可能性があります。

これらの課題に十分対応できない理由は、社会の人口が減少して高齢化するなど時代が変化していく中で、公共事業も削減され行政において予算や体制を確保することが困難になってきていること、これまで維持管理の担い手となってきた山岳会の会員の高齢化による担い手不足などが原因と考えられます。

一方、大雪山国立公園の利用に関する調査では、協力金の支払いについて積極的な意思を有している利用者が一定程度いることが明らかになっています[16]。また、大雪山に繰り返し訪れ、登山道の補修や維持管理、清掃活動を行うイベント等にも参加するような大雪山のファンが増えてもいます。

登山道補修イベント

利用者の参加・協力には、協力金・寄付金など任意で自主的な金銭の協力と、ボランティア作業など任意で自主的な労力の提供があります。

大雪山国立公園の維持管理のために参加・協力したい人がお金や労力を提供するなど、多様な課題に対応するための新たな発想が必要です。

16 平成 28 年度大雪山国立公園協働型管理体制検討業務報告書 p75-76、平成 30 年度大雪山国立公園自動車利用適正化対策業務報告書

２）利用拠点の低迷

①体験型利用の取組

利用者数が減少して事業者の経営が行き詰まった結果、廃屋が増えるなど、利用拠点が低迷していることも大きな課題です。大雪山国立公園の従来の景勝地の多くが閑散としています。

利用拠点の廃屋（撤去前）

廃屋撤去後に整備された園地

その原因として、各利用拠点で旅行形態の変化に応じた対応が模索されているものの、近年の旅行形態の変化に未だ十分に対応しきれていないことが考えられます。

近年、団体で自然の景勝地を周遊するスタイルから大きく変化し、旅行は個人の指向や好みにあわせて行われ、その楽しみ方も、遊べる、学べる、癒されるといった体験できるもの（コト消費）が人気で、旅行先で見る対象も、その土地でしか見られないものであるのか、“本物”であるのかという点が重視されます。これらに加え、旅行者がスマートフォンで写真を撮りＳＮＳで発信したくなるような見栄えも重要となってきます。

そのため、既存の景勝地を再評価し、活かしきれていない観光資源を発掘し、それらがなぜこの土地でしか見られないのかなどのストーリーを整理、磨き上げた上で発信し、旅行者に体験をしてもらい満足感を得ていただくことが重要です。景観要素が際立って多い大雪山国立公園であれば、十分に可能と考えます。

②情報提供

体験型利用の取組を行う前提として、旅行前の人に情報を届けることや、利用者が現地を訪れた際に対象地や体験活動にアクセスするための情報発信が必要です。さらに、大雪山国立公園を訪れてからも、ビジターセンターや宿泊施設、野外の案内板等、近年増加する外国人旅行者が満足できる、多言語による適切な表示を含む情報提供が必要です。

３．大雪山国立公園の目指す姿

大雪山国立公園では、荒廃や低迷を食い止め優れた価値を守ること、課題を解決することで自然環境や生物多様性の状態、利用体験の質を現状以上に豊かなものとすることを目指します。これにより、みんなが大雪山国立公園を誇りに感じ、世界の人々を魅了する山岳国立公園にしていきます。

具体的には、次の（１）～（４）の姿を目指していきます。それをひとことで表現すると、次のとおりです。

まもり、活かし、つなげよう
みんなでつくる、世界を魅了する大雪山国立公園

（１）大雪山の自然環境が守られ、より豊かになった国立公園

１）山岳地域―大雪山グレードに応じた保全

登山道の荒廃や登山者の踏み荒らしによる植生、地形や土壌の改変・消失を回復させます。これらは、大雪山グレードに応じて原生的な自然環境が維持された地域から優先的に取り組みます。

気候変動やエゾシカの影響等による植生の変化を監視して、気候変動への適応に関する取組を検討します。また、セイヨウオオマルハナバチを始めとする外来生物の侵入、定着から、高山生態系を保全します。

これらにより、広大な原生的山岳景観、火山を基盤として広大さを形作る特徴的な地形と、その上に大規模に広がる生物多様性が守られた国立公園を目指します。

２）山麓地域―多様な景観要素の保全

峡谷と柱状節理、湖、滝、温泉など、山麓地域の多様な景観要素を守り、特に利用施設から見える重要な景観要素については、その周辺の自然環境とともに良好な景観が確保された状態を目指します。

（２）魅力を活かし、質の高い利用体験ができる国立公園

１）山岳地域―大雪山グレードに応じた管理と利用

大雪山グレードに応じた登山道の管理により登山道の荒廃が解消され、周辺自然環境に調和した案内板、誘導標識等が整備され、野営指定地や避難小屋においては施設の更新と管理が行き届いた状態を目指します。

また、携帯トイレの普及、携帯トイレ関係設備の充実、既存の常設トイレの効果的な利用などにより、野外へのし尿排出をなくし、し尿の問題を解決します。

また、ドローンをはじめとする技術の進展等により新たな山岳地域における利用形態が生じ、利用者間又は利用者・管理者間で問題が生じるような時は、関係者間で対応を検討して解決し、快適に利用できる空間を維持します。

これらにより、大雪山グレードに応じた利用が行われ、大雪山の原生的で雄大な山岳景観を満喫できる状態を目指します。

２）山麓地域―利用体験の質の向上

層雲峡温泉、愛山渓温泉、大雪高原温泉、旭岳温泉、天人峡温泉、白金温泉、吹上温泉、十勝岳温泉、トムラウシ温泉、然別湖、ぬかびら源泉郷、士幌高原などすべての利用拠点において、その場所に滞在することを主要な目的とする旅行者を増やします。

そのために、大雪山国立公園の資源（温泉、峡谷、湖、雪等の景観要素のほか、これらを眺望したり体験したりできる歩道、園地、乗り物、施設[17]等。）を、世界中で大雪山国立公園でしか体験できない“本物”を感じるストーリーを持つコンテンツに磨き上げ、ＳＮＳに発信したくなるような新たな体験の仕方が提案され、それを支える体制を各利用拠点で整えます。

また、これら利用拠点の宿舎等、施設の改修、更新にあわせ、省エネルギーの設備導入や地域の再生可能エネルギーの使用による温室効果ガスの削減、廃棄物の削減や資源の循環を促進することを通じて、大雪山国立公園の利用拠点が、地域循環共生圏[18]の中核としての役割を果たして自然と共生していくイメージ（付加価値）を付け、それを利用者に浸透させます。

これらにより、山麓地域の利用体験の質の向上を目指します。

---

17 施設については国立公園の公園計画（利用施設計画）に位置付けられたものに限る。

18 「地域循環共生圏」とは、各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方で、2018（平成 30）年４月に閣議決定した第五次環境基本計画で提唱。

（３）つながっていく国立公園

１）来訪者に向けた情報発信

旅行や登山の準備段階において、大雪山国立公園に入ってから出るまでの間に必要な情報についてインターネット等を通じて、わかりやすく得られる状態を目指します。また、各利用拠点を中心としてネットワークを形成し、質の高い利用体験がいつ、どこで、又はどの施設にコンタクトを取ればできるかという情報が発信できる状態を目指します。

旅行者や登山者が実際に大雪山国立公園に来訪した際には、各施設等で必要な情報に接することができ、求める情報にアクセスしやすいよう、窓口や案内板やサインの表記が充実した状況を目指します。

また、増加する外国人利用者に対しても、必要な情報が多言語で発信されることを目指します。

情報発信を充実させることにより、利用者の満足度の向上だけでなく、山岳地域においては、遭難の減少や安全確保が実現します。

２）大雪山国立公園に関わるすべての人々に向けた価値の発信

大雪山国立公園の持つ優れた価値、荒廃や低迷を食い止め課題を解決するための取組、目指す姿が実現した状態を、大雪山国立公園に関わるすべての人々に発信するとともに、日本国内さらには世界に発信し続けることで、大雪山国立公園の価値が理解され、共有された状態を目指します。

これにより、大雪山国立公園が地域の誇りとなるばかりでなく、世界の人々を魅了し何度でも訪れてみたいと思う国立公園を目指します。

（４）みんなが協働して管理運営する国立公園

１）協働型管理運営体制の維持

私たち（大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）構成員）は、国立公園に関わる多様な立場の機関、団体が参画する協働型の管理運営体制を維持し、大雪山国立公園の目指す姿を実現する取組を進めます。

なお、私たちは、地域、観光、産業の振興、自然保護などそれぞれ立場や目的が異なる団体で構成されていますが、大雪山国立公園のために自分たちができること、貢献できることを考えて実施します。また、大雪山国立公園を通じて地域社会の課題解決にも寄与していきます。

２）管理運営への利用者の参加、周辺地域との連携

このビジョンは、私たちに加え、大雪山国立公園の利用者、関係するあらゆる人々（みんな）と共有し、浸透させます。そして、みんなで目指す姿を実現するための取組を実施します。具体的には、大雪山国立公園の管理運営に参加・協力したい人がお金や労力を提供できる仕組みが整った状態を目指します。

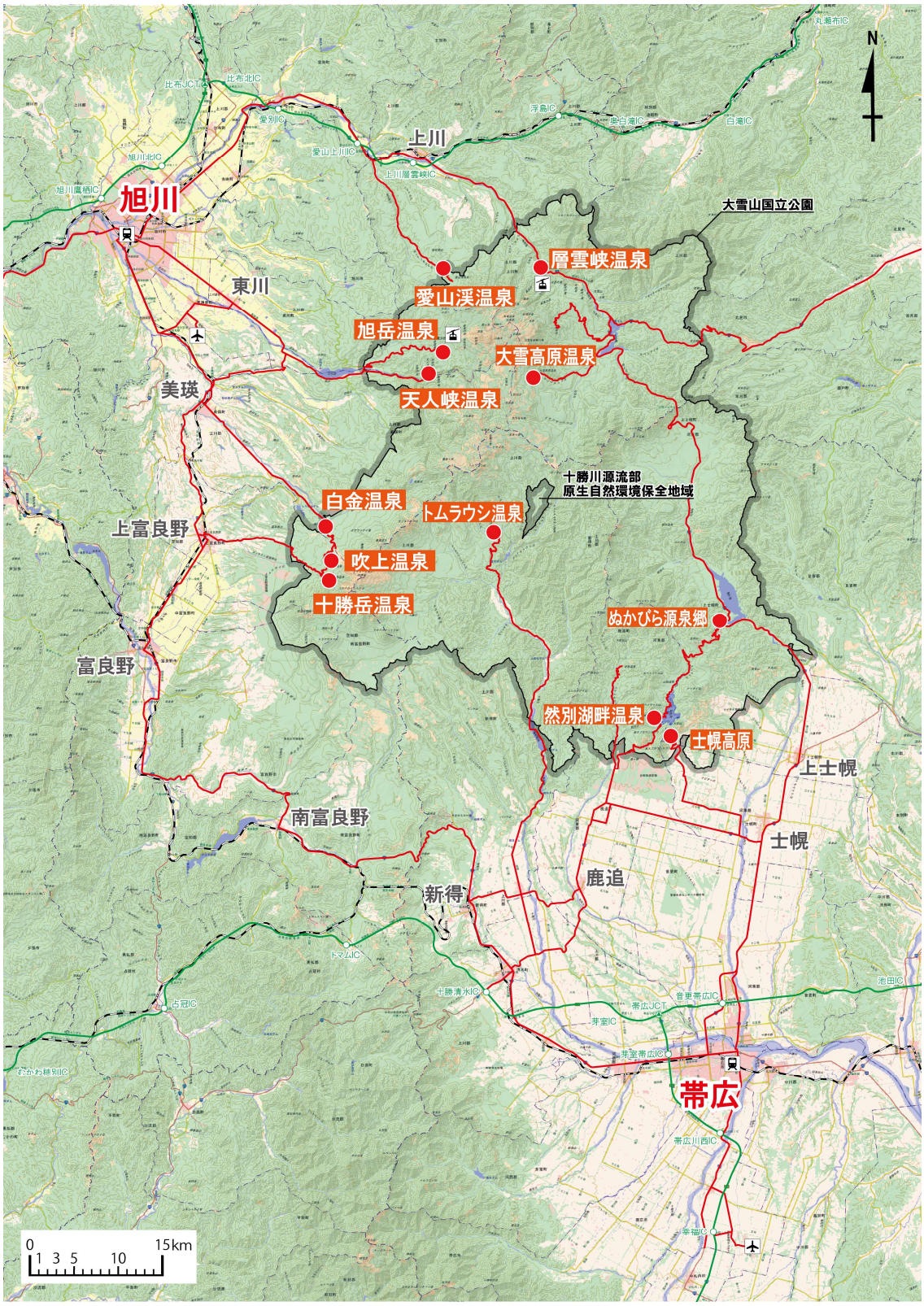
また、大雪山国立公園周辺の旭川地域、帯広地域は、大雪山国立公園にアクセスする拠点です。国立公園外の地域から大雪山を見ると、雄大な山々が連なる素晴らしい景観を見ることができます。旭川地域、帯広地域などの地域も、大雪山国立公園にとって重要な地域であると考え、今後は、両地域との連携をさらに推進し、両地域においても大雪山国立公園の情報が発信される状態を目指します。

３）みんなが学び成長し、将来世代へ引き継ぐ国立公園

大雪山国立公園を取り巻く自然的、社会的環境は今後も急速に変化していくことが予想されます。今後の変化に柔軟に対応しながら目指す姿を実現していくためには、みんなが学び、成長していくことが重要です。

このビジョンを実現するために必要な具体的な取組を実施できる人材を育成する観点から、学びを支援する体制が整った状態を目指します。

みんなで、これらの目指す姿が実現した国立公園を、後世まで地域の宝として守り続け、将来世代に引き継いでいきます。



大雪山国立公園と旭川地域、帯広地域の位置関係

４．ビジョンの実現に向けて

（１）取組の方向性と具体的取組の実施に向けて

ビジョンを実現するために、協働型の管理運営体制のもと、利用者の参画も得つつ、別添の取組を適切に実施していく必要があります。

具体的には、ビジョンの内容を大雪山国立公園管理運営計画に位置づけるとともに、同管理運営計画を構成する管理運営方針、風致景観及び自然環境の保全に関する事項、適正な公園利用の推進に関する事項に、別添の取組を軸にビジョンの記述を反映させ、実施していくことが必要です。

（２）ビジョンの評価について

2024（令和６）年度の大雪山国立公園 90 周年を一つの区切りとして、国立公園に関わる多様な立場の機関、団体のそれぞれが、また、利用者、関係者すべてがビジョンに基づき自らできる取組を考え、協力して実行していきましょう。そして今から 10 年後の 2030（令和 12）年を目標として大雪山国立公園のビジョンの達成状況を評価し、将来にわたって優れた国立公園の管理運営を実現していきます。

別添　ビジョンを実現するための取組例

1．大雪山の自然環境が守られ、より豊かになった国立公園の実現

- 大雪山グレードに応じた歩道の補修等維持管理の促進
  （植生の回復、地形・土壌の浸食防止）
- 気候変動による影響と適応策検討のためのモニタリング
  （国立公園等の保護区における気候変動への適応策検討の手引き、平成 31 年、環境省自然環境局）
- セイヨウオオマルハナバチのモニタリング、防除活動
  （大雪山国立公園高山帯におけるセイヨウオオマルハナバチ防除の考え方、平成 30 年、環境省北海道地方環境事務所）
- エゾシカによる植生への影響把握、対応の検討
- 森林植生の復元活動の継続（十勝三股園地、ミユビゲラの森など）

2．魅力を生かし、質の高い利用体験ができる国立公園の実現

（1）山岳地域

- 適切な歩道維持管理のための基盤形成
  （未執行区間、課題のある区間の段階的解消、最終的な全区間適正化等）
- 大雪山グレードに応じた歩道の補修等維持管理の促進【再掲】
- 歩道関連施設の整備、更新
- 歩道の適正利用（大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言を含む）
- 利用者参加による管理運営、維持管理の検討
  （利用者の自主的な金銭・労力の提供、民間による資金の活用）
- 外国人利用者対応の充実

（2）山麓地域

- 利用可能な資源の発掘、ストーリーづくり、新たな体験の提案、発信
- 利用拠点の満足度向上
- 安心・安全の確保
- 外国人利用者対応の充実【再掲】

3．つながっていく国立公園の実現

- 一元的な情報発信
- 利用拠点間のネットワーク化（ビジターセンター等の利用施設間の連携）
- 大雪山国立公園で行われる活動の認定等（パートナーシップ）

４．みんなが協働して管理運営する国立公園の実現

- 総合型協議会の構築と維持
- 利用者参加による管理運営、維持管理の検討
  （利用者の自主的な金銭・労力の提供、民間による資金の活用）【再掲】
- 国立公園内外の連携やプロモーションの促進
  （※一元的情報発信、モデル的な事例づくりと国立公園外（関係 10 市町の国立公園区域外）への普及）
- ビジターセンター等の国立公園の拠点施設における学びの支援
  （関係団体・関係者が行うフォーラムや講座等）
- 上記１及び２の実現のための調査・研究の推進、研究成果の大雪山国立公園関係者へのフィードバックと、データの活用
- 大雪山国立公園の管理有効性評価の実施